



<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/kanto/>

目 次

図書館の学習教育支援の現状と新展開について ーラーニング・コモنزの創成ー ……………	1
平成 19 年度附属図書館実績報告及び平成 20 年度 計画について ……………	4
学術情報に関する日独シンポジウムと ワークショップに参加して ……………	6
東海地区デジタルレファレンス・フォーラム報告 ……	9
本学教員著作物の寄贈リスト ……………	11
電子ブック：新しいタイトルが増えました ……	12
利用者から見た図書館 ……………	13

図書館の学習教育支援の現状と新展開について

ーラーニング・コモنزの創成ー

伊 藤 義 人

1. はじめに

図書館というと静謐な空間の中で、1人で学習をしているというイメージを持っている人が多いと思います。名古屋大学の図書館でもそうですが、どこの図書館でも通常の閲覧座席で話をしていると注意されるのが普通です。特に、外国の図書館では、そこの図書館員に館内を案内してもらおうときでも、ささやくように話すのが普通で、それでも利用者から文句を言われた経験があります。

名古屋大学附属図書館中央館では、通常の閲覧座席の他に、大学院生や教員のための18室の研究個室が用意され、その利用頻度は非常に高く、昨年「館長と話そう! 2007」で、学部学生から、是非とも学部学生にも開放してほしいとの要望もありました。静謐で個別の学習空間の必要性は、今後ともあり、図書館はそれに応えていく必要があります。

一方、中央館では共同研究室とグループ研究室がそれぞれ4室ずつ用意されており、これらはガラスで締め切っており、あまり話し声がもれないようにしてあります。グループで相談や話をしながら学習をすることができるため、これらの人気も非常に高いようです。ただし、この共同研究室は単に机と椅子のある部屋としての機能しか持っていません。他にPCサテライ

トラボ室がありますが、これは逆に30台のパソコンがぎっしりと並べられており、端末室機能しか有しておらず、他の作業空間はありません。

大学進学率が50%を超えるようなユニバーサル・アクセス時代において、多様な学生や社会人の学習ニーズに対応するためには、大学図書館の新たな機能として、静謐な個別の学習空間だけでなく、ハイブリッド図書館としてグループでデジタル情報と紙情報をシームレスに使い、種々のサポートも受けられる新しい学習空間をも作る必要性が世界的に認識されるようになってきています。すなわち、教科書と参考書だけで個別に学習するのではなく、大量なデジタル情報をも駆使し、創造的な考える力をつけるような学習空間が求められています。

2. ラーニング・コモنز (Learning Commons) の必要性と特徴

ユニバーサル・アクセス時代、あるいは全入時代を迎える大学にとって、教育の質の維持・向上は最も大きな課題であると言われております。私も参画して、平成18年3月に出された文部科学省の審議会報告「学術情報基盤の今後の在り方について」(以下「審議会報告」という。)は、大学図書館が大学の戦略的ビジョンに立つ

て学生の学習及び学生生活の場としての基盤設備を整備するとともに、教育支援サービス機能の強化や情報リテラシー教育を推進することを強く求めています。これは、大学教育の質を維持・向上する上で、多様で、ニーズも異なる学生の学習目標に適切に対応できる学習教育支援環境・体制を整備することが喫緊の課題であること、また、その中で大学図書館の果たす役割が極めて重要であることを示しています。

新しい学習教育支援環境としてのラーニング・コモンズ (Learning Commons、コモンズは広場や共有地という意味) は、このような大学及び大学図書館に対する新たな要請を具現化することを目的としています。すなわち、電子情報や印刷資料を含む多様な情報資源と情報技術及びそれらを活用するための人的支援を統合した環境を図書館内に実現し、学生の多様な学習目標、学習形態及び学習方法に対応することにより、学生1人1人の情報活用能力を涵養し、課題探求能力を有する優れた人材の養成を支援するものです。

従来、学生の学習に必要な図書館資料等の情報資源、コンピュータ等の情報基盤及びそれらを効果的に活用するための人的支援、学習相談等は、大学内において個別に提供されてきました。ラーニング・コモンズは、そのような学習教育環境を劇的に改善しようとするもので、以下のような特徴を持たせようとしています。

- 1) 学生の学習に必要な情報資源や情報技術関連設備とそれらの活用能力を育成するためのサポートを学生のスキルの程度や情報ニーズに応じて統合的に提供する。
- 2) 図書館職員によるレファレンスサービス、教員による情報リテラシー教育、TA等による情報技術活用支援、学生のピア・チュータによる学習相談等のサービスを一箇所で受けられるワンロケーション・サービスとする。
- 3) これを実現するために、大学図書館が教養教育院、学部・研究科、情報連携基盤センターや情報メディア教育センター等学内の教育・情報施設との連携・協力を強化し、大学の教育課程に深く関与する新たな役割を創出する。

- 4) グループ・プレゼンテーション、授業、自学自習等様々な学習形態に対応したスペースと必要な設備、ツール、情報資源を統合的に提供する。
- 5) パスファインダー (<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/guide/literacy/index.html>)、オープンコースウェア「名大の授業」、学術機関リポジトリなどのデジタル・コンテンツと印刷体の図書館資料をシームレスに活用できる能力を効果的に育成する情報リテラシー教育の実践の場を提供する。
- 6) 「審議会報告」で示された今後の大学図書館における教育支援機能強化及び基盤設備整備のあり方のモデルを提示することになり、他機関での同様の取り組みを支援する。

以上のような趣旨で概算要求を行い、平成20年度に国から採択を受けることができました。

3. ラーニング・コモンズの具体的な計画

具体的なスペースとしては、中央図書館2Fのメインフロア全体をラーニング・コモンズに整備します。2Fフロアの南側は、平成20年に整備しますが、現在は目録情報のカードボックスと語学辞書や百科事典などの参考図書が配置してあります。目録情報は、既にほとんどのものをデータベースに入れ、OPACでパソコンから検索可能としており、参考図書はその多くは類似のものを含めて電子媒体でも導入し、インターネット経由で利用可能となっています。このように、これらを撤去して(一部は他の階へ移設)、新しい学習環境をつくり図書館を活性化することは時代の必然と考えられます。なお、2F以外の全てのフロアは従来通り、静謐な空間として残します。

2Fフロア全体のフロアプランは詳しく検討中ですが、図のようなものを現在考えています。すなわち、南側は、ガラスで仕切った「グループワークスペース」として、各種の什器は可動として、配置を自由に変えて利用でき、プロジェクターなども備えて、プレゼンテーションなども行えるようにします。もちろん、無線LANなども備えて、図書館のデジタルコンテンツを利用可能とします。可動の什器を並べ替え

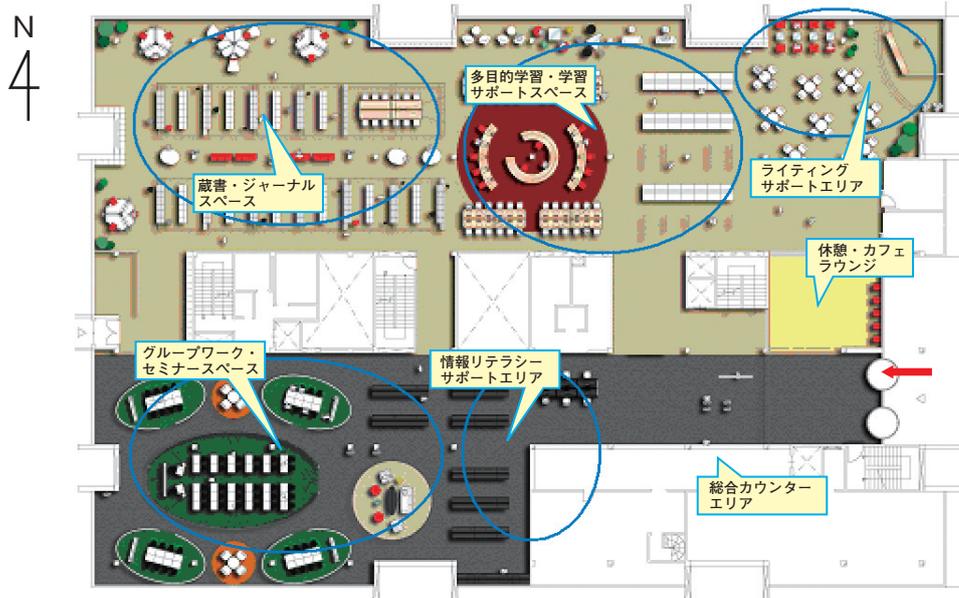


図 中央図書館2Fのラーニング・commons想定図 (仮)

て大きな作業空間をつくり地図なども広げて学習ができるようにします。資料入手のための情報検索などの支援も受けられるように人員を配置する予定です。

2Fフロアの北側は、平成21年度に整備の予定ですが、その西側は「蔵書・ジャーナルスペース」として、電子媒体の資料と印刷媒体の利用のハイブリッド空間を形成します。東側は、ナレッジカフェスペースとして、ゆったりとくつろぎながら学習するスペースを想定しています。現在の中央図書館は、入館ゲートの前のラウンジだけで、飲食を可能としていますが、このスペースをもう少し広げること検討しています。最近の欧米の図書館では、このような空間を限定して設けることが多くなっています。種々の問題もありますので、まだ最終決定ではありません。

なお、スペース以外にも2年間の年次計画に基づき以下のように実施する計画を立てています。

1) 教材作成システムの研究開発

パスファインダーの作成及びパスファインダーとその他の教材との連携システムを国際標準 (SCORM: Sharable Content Object Reference Model) に準拠して開発する。

①パスファインダー作成支援システムの研究開発

②オープンコースウェア「名大の授業」、パスファインダー、学術機関リポジトリなどの教材・コンテンツとの連携システムの研究開発

③作成したコンテンツのオープン化、パスファインダー作成支援システム等のオープンソース化

2) 文書作成能力を涵養するライティング・センターの整備 (情報リテラシー関連の情報資源・ツールの整備)

3) 地域連携によるデジタルレファレンス、地域電子コレクションの構築と支援による地域への貢献

4. ラーニング・commonsの期待される効果

ラーニング・commonsの形成によって、学生の学習環境の多様性を確保でき、以下のような効果を期待しています、

1) 学生が学習過程で必要となる授業関連情報等を統合的に入手することができ、学習効果の向上につなげる。

2) 学生が学習過程で必要とする人的援助を適時に、ワンロケーションで得られることから、学生の学習意欲の向上につなげる。

3) 学生が必要とする情報を自ら検索し、評価し、活用する能力、すなわち情報活

2) 教育支援サービス・情報リテラシー教育

①図書館ガイダンスの開催

平成19年度は、中央館で講習会36回、留学生ガイダンス7回、基礎セミナーのTA向け講習会8回を実施、各学部でも講習会を実施した。また、スタッフページでプレゼンテーション資料を共有し、お互いに参考にした。

②パスファインダーの作成

平成19年度も継続して作成にあたり、主に後期基礎セミナーで使用するタイトルを中心に、公開件数を60件に増やした。作成にあたっては、教養教育院と連携して希望を募り、評価のアンケートも実施した。また、研究開発室でパスファインダー作成支援システムの開発を進めた。

③学生からの要望への対応等

平成19年度の「館長と話そう！」の中で学生から希望のあった項目への対応を図り、2階ラウンジのソファと椅子を一新した。また、もっと見やすくとの要望のあったホームページも、一部改良を実施した。

また、年末年始を除く通年開館の試行を行うとともに、中央図書館内の案内表示の改善や利用案内の英語版を作成し、利用環境の改善に努めた。

2. 研究支援・学術情報基盤整備

1) 学術デジタルコンテンツの整備

①電子ジャーナルの整備

学術情報基盤としての電子ジャーナルの整備については、毎年の値上がりに対応するため、苦労を重ねているが、20年度においても電子ジャーナルのタイトル減が起こらないように、各部局の協力を得て、間接経費で維持が図れるよう働きかけた。従来予備費(間接経費)で措置されていた電子ジャーナル導入経費が、平成19年度から本予算の中で事項として認められたのに続き、残りの電子ジャーナル関連経費等も含めて、平成20年度からは本予算の中で電子情報化経費として事項立てされることとなった。また、昨年度に続き、Natureのバックファイルが創刊号から利用できるようになった。

電子ジャーナルやデータベースの学外からの利用は、従来のVPN接続サービスの終了に伴い、

EzProxyによる新たなプロキシサービスに移行し、利便性が大幅に向上した。

②資料の電子化・データベース化

昨年度に引き続き科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受け、エココレクション(環境共生)データベースの整備を進めた。

2) 最先端学術情報基盤(CSI)事業への参加とNAGOYA Repositoryの取り組み

①NAGOYA Repository

コンテンツの充実・拡大に向けて、平成18年度に形成された「研究者協力コミュニティ」に対する働きかけを継続して行った。更に、学位論文提出時の掲載許諾制度化の拡大を図った。

②東海地区CSI事業報告会

本学では平成19年度も、国立情報学研究所、附属図書館及び本学情報連携基盤センターの共催で、標記報告会を3回開催した。附属図書館では、「学術機関リポジトリの今後」と題した報告会を開催し、全国から79名の参加者があった。

3. 社会貢献・社会連携

1) 資料展示会・講演会

恒例の年2回の企画展示会を行ったことに加え、平成19年度は、名古屋大学ホームカミングデイの開催に合わせ『『学報』の表紙を飾った貴重書』の展示会を行い、1日だけの開催にもかかわらず千人以上の来場者があった。

2) 東海地区図書館協議会等の活動

国立大学図書館協会の地区支援事業の活動として開催した「東海地区デジタルレファレンス・フォーラム」には、全国の国立大学だけではなく、東海地区の公私立大学の図書館、公共図書館から100名の図書館員等が参加、活発な討議や意見交換、交流が行われた。

また、東海地区大学図書館協議会の新たな研修制度として「図書館職員基礎研修」を行った。

4. 業務運営の改善・施設設備の整備

1) 機関別認証評価

大学評価・学位授与機構による大学機関別認証評価結果において、前述した蔵書整備アドバイザー制度について、「制度の導入により、図書整備充実と提供を図っている」ことが優れた点として挙げられた。

プログラムの前半は、「学術図書館の将来展望および発展」という題目で、ドイツの場合をノルベルト・ロッサウ氏 Dr. Norbert Lossau（ニーダーザクセン州立大学図書館館長）が行い、私が日本の場合を講演しました。ドイツにおいては学術図書館は、大学図書館だけでなく国立や州立の図書館も大きな役割を果たしていますが、日本は大学図書館と学術図書館は同じ意味として扱い、日本の少子高齢化による18歳人口の減少に伴う高等教育の現状から始め、日本における大学図書館の歴史と現状を話し、名古屋大学附属図書館の事例を挙げながら、学術情報流通のあり方への展望と課題について講演しました。私も参画した2006年3月に出た文科省審議会報告「学術情報基盤の今後の在り方について」についても参考にしました。

2人の講演の後で、モデレータとしてマティアス・カウン氏 Mr. Matthias Kaun（ベルリン国立図書館東アジア部長）の司会でパネルディスカッションが行われました。モデレータの最初の感想として、ドイツと日本の図書館長が、相談した訳でもないのに、1) デジタル情報と紙情報をシームレスに使えるハイブリッドライブラリーの実現、2) オープンアクセスおよび学術機関リポジトリへの対応、3) ラーニングコミュニティなどの新しい学習空間と機能の提供、4) e-Scienceの導入と対応、5) 人材教育など、手法の違いや進み具合は違っても多くの共通した学術図書館の将来展望を持っていることに対する驚きが表明されました。機関リポジトリに関しては、ドイツは、DRIVER - Digital Repository Infrastructure for European Research (www.driver-community.eu) の中で動き、日本では国立情報学研究所と大学のCSI (Cyber Science Infrastructure) 共同プロジェクトで動いており、現時点での登録機関数は、ドイツが120機関で世界第2位であり、日本が66機関で世界第4位であり、共通点と相違点が明確になりました。

シンポジウムの後半は、学術図書館司書の将来性ある養成という題目で、マイケル・シードル教授 Prof. Dr. Michael Seadle（フンボルト大学図書館学研究所所長）からドイツにおける今後の司書教育の在り方について講演がありました。フンボルト大学図書館学研究所は、ドイツ

で唯一の図書館学の研究所です。司書養成において、今後必要な資質として、1) 文書だけでなく、種々の媒体資料の駆使、2) 利用者中心の考え方および3) 自律的に考える能力と時代とともに変わる能力を挙げられました。利用者が探していないもの（利用者が知らない有効な資料）をも見つける能力が必要であるというような示唆的な内容も含まれていました。なお、夜の懇親会で聞いたところ、ドイツにおいては、従来は通常の公共図書館の司書資格と学術図書館の司書資格は全く異なるものでしたが、最近では基礎教育は共通にして、その上に専門性を上乘せする方向になりつつあるそうです。

日本の場合を根本彰教授（東京大学大学院教育学研究科）が講演されました。日本における司書資格は20単位を取得すれば得られ、年間1万人を超える資格者が出ますが、その資格によって図書館職員になるのは極端に少なく、ライブラリアン養成のインフラが整っていないという日本の現状を報告されました。

3. ワークショップ

28日(木) 午後から29日(金)にかけて、ワークショップ「欧州日本資料図書館における日本情報検索のノウハウ」が行われました。28日の午後には、アンネ・バルコウさん（ベルリン国立図書館東洋部）と蓮沼龍子さん（ケルン日本文化会館図書館主任司書）から、「ベルリン国立図書館東洋部門のデータベース・ポータル CrossAsia」と「The Japan Foundation のデータベース・ポータル」について、それぞれ説明がありました。

29日には、まず、根本先生が「学術情報基盤としての大学図書館の役割」と題して、1) 学術資料／情報の現在、2) 図書館的「知の組織化」、3) 「場所としての図書館」再考、4) 大学図書館員の新しい課題について講演されました。そして、私が「大学図書館利用者を対象とするオリエンテーション」と題して、日本における図書館情報リテラシーについて、名古屋大学だけの事例でなく、亜細亜大学、明治大学、東北大学、慶應義塾大学の特徴ある事例について講演しました。日本資料を扱っている欧州の司書の方々のため、日本語論文の探し方に関する

る名古屋大学におけるオリエンテーションについても話しました。名古屋大学のパスファンダーに関して、参加した司書の方から詳しい質問がありました。

その後は、以下のようなプログラムで、日本資料のアクセス方法などの実務的な講演が行われました。

- 1) 国立情報学研究所における学術コンテンツ・ポータル：阿蘇品治夫（国立情報学研究所学術基盤推進部）
- 2) 国立国会図書館データベースを使いこなそう：澤井優子（国立国会図書館主題情報部人文課）
- 3) 日経テレコン 21 を使いこなそう：杉田隆（日経ヨーロッパ社）
- 4) MagazinePlus と BookPlus を使いこなそう：和田淳（日外アソシエーツ社営業部長）
- 5) Japan Knowledge を使いこなそう：館野純子（ネットアドバンス社）

各講演の後で、質疑応答と討議が行われました。私も質疑応答と討議に参加しましたが、日本において行われるこの種の集まりでは、参加者の司書の人達はあまり発言しませんが、このワークショップでは、時間が足りないほど活発に行われました。欧州で働く日本資料担当の司書の方々の意欲と利用者サービスのための日本資料への渴望をひしひしと感じました。

4. おわりに

欧州の日本資料を扱っている司書の人達は、日本の図書館事情が非常にわかりづらいと言われていました。日本の大学の国際化が叫ばれていますが、日本の図書館界からの情報発信は少

ないようです。今後、情報発信だけでなく人的交流が是非とも必要と思いました。

北海道よりは寒いといわれているベルリンは、今年は暖冬で、すでにツツジやレンギョウも花を咲かせており、名古屋よりは暖かい状況でした。3日間の滞在でしたが、2日間をシンポジウムとワークショップで夜も拘束され、残りの1日も、午前中に国立図書館（2号館）の見学に行き、午後には帰途につきましたので、自由時間は朝食前の散歩だけという強行スケジュールでした。それでも、ベルリンの冬とわずかの春を楽しむことができました。緑の多い都市としてベルリンは世界的に有名ですが、市内は丸い実だけを沢山つけたマロニエなどの落葉樹が多く、曇った空に樹木の枝が突き刺さるような様子なかで、シジュウカラ、カワラヒワ、スズメ、カラス（カササギ）がいました。また、戦勝記念塔ジーゲスゾイレへ向かう王室の狩猟所であったティーアガルテン（公園）が都市の真ん中にあるにもかかわらず、野ウサギがいるのにはびっくりしました。

シンポジウムとワークショップの開催にあたって、ベルリン日独センター副事務総長の佐藤宏美さんと同センタードキュメンテーション部長の桑原節子さんに大変お世話になりました。特に、桑原さんは、3月末で退職されたため、最後の大きな仕事になりました。この場を借りてお礼申し上げます。最後になりましたが、私の講演資料作成に中央図書館の蒲生英博課長補佐と次良丸章課長補佐にお世話になりました。ここにお礼申し上げます。

(いとう・よしと 附属図書館長)



写真1 ベルリン日独センター



写真2 会議場

東海地区デジタルレファレンス・フォーラム報告

中井 えり子

1. はじめに

東海地区デジタルレファレンス・フォーラムは、平成19年度国立大学図書館協会地区協会助成事業に東海地区国立大学図書館協会（会長館：名古屋大学附属図書館）が応募して採択された事業です。平成20年3月7日（金）に名古屋大学附属図書館が事務局となり、東海地区国立大学図書館協会が主催して名古屋大学野依記念学術交流館で開催しました。

趣旨は、東海地区（愛知・岐阜・三重・静岡）の国公立大学図書館及び公共図書館の図書館職員を対象として、デジタルレファレンスについての講演会とワークショップを実施し、館種を超えたレファレンス関係担当者が一同に集まることで、新しいレファレンスサービスの在り方について考え、互いに連携・協力しあうことのできる基盤を築くことです。

2. プログラム

●講演会（10：00～12：00）

- (1) 市川美智子（愛知医科大学医学情報センターパブリックサービス担当）

演題：Web パスファインダーを活用した健康支援と図書館連携

- (2) 鈴木 智之（国立国会図書館関西館図書館協力課）

演題：レファレンス事例集データベースの構築と活用

●レファレンス担当者交流会（昼食会）

（12：10～13：45）

●ワークショップ（1）及び（2）

（13：45～16：00）

- (1) パスファインダーの事例紹介・活用について

事例報告：栗野 容子（名古屋大学附属図書館情報サービス課参考調査掛長）

柴田佳寿江（三重大学附属図書館情報リテラシー担当）

土屋 雅彦（静岡県立図書館調査課一般調査係長）

寺井 仁（名古屋大学附属図書館研究開発室助教）

助 言：市川美智子（愛知医科大学医学情報センター）

- (2) メールレファレンスの現状と課題

事例報告：渡辺 基尚（岐阜県図書館情報サービス課郷土担当主任）

高橋 弘子（広島大学図書館学術普及グループ主査）

松山 龍彦（国際基督教大学図書館グループ長）

助 言：鈴木 智之（国立国会図書館関西館）

●事例パネル展示及びデモンストレーション

3. 講演会

市川美智子氏は、愛知医科大学図書館のミッションの一つである利用者支援を目的として、地域の4公共図書館と連携して「健康支援」のための地域連携パスファインダーを作成している。これは、医療・健康情報に強い地域づくり、患者参加型医療支援をめざすもので、公共図書館と連絡会を開いてパスファインダー掲載資料を選定し、医学系データベースの利用法などを共同学習し、地域図書館との共同レファレンスをめざす。この地域連携パスファインダーの特色は、一般市民や患者さんに優しくあることを心がけ、資料紹介にあたってはWeb情報では得られない解題を記載することと、Webサイトへのリンクを控えめにして地域の蔵書では不足気味の情報を提供することである。今後の課題としてOPACや機関リポジトリでの検索を可能にすること、Web情報の安定提供、大学図書館を含めた県内横断検索の機能アップなどがある、といったことを述べられました。

鈴木智之氏は、レファレンス協同データベースについて、そのシステム概要や機能、参加館や利用登録の現状について説明があり、同データベースの活用法について、図書館員、一般利用者、研究者を対象に、レファレンス情報源、サービス改善、研修、広報等に活用できると事

例とともに紹介されました。このデータベースの登録件数が少ないことが課題であるとのことでしたが、件数を増やすことについて、会場からは、国立国会図書館が自らもっと登録すべきであるとか、インセンティブを設けてはとの提案がありました。

4. ワークショップ

(1) パスファインダーの事例紹介・活用について

名古屋大学附属図書館からは、パスファインダーの現状と課題の説明があった。講義で利用することを目的に教員から依頼を受けてパスファインダーを作成しており、その数は60種類。紙媒体だけでなく、図書館 Web サイト上でも公開しているため多くのアクセスがあるが、作成者数が少ないことやメンテナンスの問題等の課題もあることが紹介されました。

三重大学附属図書館からは、「パスファインダー入門講座」(学生及び学校図書館関係者対象)を開催したことがきっかけでパスファインダーを作成することになり、主に Web サイトでの提供を中心に行っていると報告がありました。作成数を増やすことや効果的な活用方法という課題解決をおこなっており、新たに大学授業との連携を目指すことやレファレンス協同データベースへの登録が目標となっているとのことでした。

静岡県立中央図書館は、地域行政資料のパスファインダーなど、地域に根ざした紙媒体によるパスファインダーの作成を行っており、さらにより生活に密着した「くらし情報」提供へのニーズに応えることや紙媒体での提供だけでなく、新システム導入時期にはデジタル化を進めることを計画していると報告がありました。

名古屋大学附属図書館研究開発室からは、「パスファインダー協同作成支援システム」の紹介があり、ネットワーク上でのコンテンツの協同作成・管理を通して、現状のパスファインダーの課題解決にもなるシステムを構築していると報告がありました。

総括として、市川美智子氏から、上記報告の質疑応答の内容もふまえたうえで、館種を越えた連携を図ることにより、パスファインダー作

成を効率的に行なうことが可能であるという地域連携の効果が提案されました。

(2) メールレファレンスの現状と課題

岐阜県図書館からは、メールレファレンスの受付から回答までの流れや質問内容が紹介され、実績として徐々に増えていること、事実調査の次に文献紹介が多いことや海外からも問合せがあるなどの報告がありました。利点として、電話より詳細で、文書より迅速な回答ができ、ウェブサイト情報を紹介しやすい、また記録の蓄積等が容易であること、一方課題としてメールレファレンス画面の作り、携帯メールからの質問への対応などが報告されました。

広島大学からは、Web レファレンスの導入についてその背景やフォームづくりの検討過程、メールレファレンスへのアクセスルートや回答時の工夫が報告されました。利点として、気軽に問い合わせてもらえる(レファレンスカウンターでは聞きづらい)、検索ツールが Web に移行しているため回答しやすい、ファイルを添付できるなどがあるが、回答する体制(語学も含めたスキルも含む)や質問内容の確認に不安が残るなどの課題もあるとのことでした。今後は学外者への対応や学内学生に対しては検索技術を習得できるような教育的配慮について検討する必要があるとのことでした。

国際基督教大学からは、質問と回答の管理、レファレンス質問のデータベース化、他参加館への質問回送といった機能を持つ QuestionPoint の概要と導入について説明があり、レファレンスの Q&A と QuestionPoint を統合して公開することにより格段に質問件数が増えたことが報告されました。そのメリットとして、利用者が他の利用者のニーズやレファレンスとは何かを知ることができ、また外部の検索エンジンからも読むことができるなどがあるとのことでした。

鈴木智之氏は、メールレファレンスは、気安さ(とりあえずきいてくれる)や他のシステムとの連携性がある一方、スパムメール対策やレファレンス内容の高度化への対応などの課題があること、QuestionPoint を導入することにより、レファレンス内容が外部から検索が可能となるとまとめられました。さらに共通の課題として、

Google 時代を反映して、Google と同じ土俵で対応することが期待されるであろうから、内容と迅速さの面で図書館の質が問われるため、図書館の高度化をめざす必要があること、また、どこまで回答するかについて、教育的配慮ということもあるが、知りたいと思っていることを

そのまま教えることによって、利用者数を増やすということも考えてもいいのではないかという提言がありました。

(なかい・えりこ 前情報サービス課長)

本学教員著作物の寄贈リスト

中央図書館では、教員著作物等を積極的に収集しています。平成 20 年 1～3 月は下記の図書を寄贈していただきました。ここにあらためてお礼申し上げます。

(寄贈者の敬称は略します。)

所 属	寄贈者名	寄 贈 資 料 名	資料 I D	配置場所
文学研究科	加藤 国安	越境する庾信：その軌跡と詩的表象（上・下巻） / 加藤国安著 - 東京：研文出版, 2004. 9	11620392 ～ 3	中央学 921.4/Ka
教育発達科学研究科	李 正 連	韓国社会教育の起源と展開：大韓帝国末期から植民地時代までを中心に / 李正連著 - 岡山：大学教育出版, 2008. 2	11617438	中央学 379/ I
工学研究科	金田 行雄	IUTAM Symposium on Computational Physics and New Perspectives in Turbulence/edited by Yukio Kaneda - Dordrecht : Springer, c2008	41445610	中央図 423.8/K
工学研究科	伊藤 義人	なごや平和公園の自然 (2007) / 伊藤義人著 - 名古屋：なごや平和公園自然観察会, 2007	11618147	中央学 460.7/I
理学研究科	山脇 幸一	The Origin of Mass and Strong Coupling Gauge Theories : proceedings of the 2006 International Workshop, Nagoya University, Nagoya, Japan 21-24 November 2006 / editors, M. Harada, M. Tanabashi, K. Yamawaki - Singapore : World Scientific, c2008	41445608	中央図 439.6/H
名誉教授	野村 浩康	科学研究費補助金からみる全国大学総合ランキング：科学研究費補助金採択研究課題数による大学の研究活性度の調査研究 / 野村浩康 [ほか] 著 - 東京：慧文社, 2005. 8	11614567	中央学 377.7/N
名誉教授	野村 浩康	全国大学の研究活性度 / 野村浩康 [ほか] 著 - 東京：トランスアート, 2006. 2	11614568	中央学 377.7/N
名誉教授	野村 浩康	全国大学の研究活性度 2004 / 野村浩康 [ほか] 著 - 東京：トランスアート, 2006. 2	11614569	中央学 377.7/N
名誉教授	野村 浩康	全国大学の研究活性度 2005 / 野村浩康 [ほか] 著 - 東京：トランスアート, 2006. 2	11614570	中央学 377.7/N
名誉教授	伏見 康治	光る原子、波うつ電子 / 伏見康治著 - 東京：丸善, 2008. 1	11614571	中央学 429/H
名誉教授	大久保泰甫	日本法の国際的文脈：西欧・アジアとの連鎖 / 早稲田大学比較法研究所編東京：成文堂(発売), 2005. 3	11617432	中央図 321.9/W

電子ブック：新しいタイトルが増えました！ 学習・研究にご活用下さい。

電子ブックへのアクセス(学内限定)

附属図書館WEBページ> 電子ブック <http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/db/ebook/ebook.html>

■調べる 電子ブック
Gale Virtual Reference Library

Gale Group刊行の参考図書の電子ブック版です。新たに6種類22冊のオンライン版事典を全文検索し、閲覧することが出来ます。全32タイトルの事典を横断検索することが可能になりました。

【名大の契約電子ブック】

■ しらべる電子ブック ■

<p>Gale Gale virtual reference library 事典 / 英語</p> <p>KOD Kenkyusha Online Dictionary 辞書 / 英語・日本語</p> <p>Wiley InterScience 事典 / 英語</p> <p>その他 化学書資料館、理科年表 / 日本語</p>	<p>Japan Knowledge 辞書・事典・叢書 / 日本語</p> <p>Oxford Oxford Reference Online 辞書・事典・手引き / 英語</p> <p>Blackwell Reference Online 辞書・事典・手引き / 英語 <i>New!</i></p>
--	--

■ よむ電子ブック ■

<p>NetLibrary 多分野 / 英語</p> <p>SpringerLink Book Series 多分野 / 英語</p>	<p>Science Direct 生化学・生命科学 / 英語</p>
---	--

■調べる 電子ブック
Blackwell Reference Online

人文科学・社会科学などの分野を中心にした265タイトルの辞典などをオンラインで検索することができます。全文検索し、閲覧することができます。利用可能な図書はOPACで表示されます。

■読む 電子ブック **NetLibrary**

洋書の電子ブック592タイトルと無料で利用可能な約3,400タイトルが利用できましたが、新しく和図書128冊の電子ブックも利用できるようになりました。複数の電子ブックの内容を横断検索したり、1冊の電子ブックの内容だけを検索したりすることも可能です。

《和図書タイトルの一部》

- ・「現代史資料」(みすず書房)
- ・「金田一春彦著作集」(玉川大学出版部)
- ・「宮本常一著作集」(未来社)
- ・「リアリティ・トランジット：情報消費社会の現在」、「新聞と民衆：日本型新聞の形成過程」、「漱石のリアル：測量としての文学」、「文明のなかの博物学 上・下」ほか(紀伊國屋書店)
- ・「シリーズく日本語探究法」、「朝倉国語教育講座」、「朝倉漢字講座」、「物理学30講シリーズ」、「シリーズ数学の世界」、「講座く情報をよむ統計学」、「したしむ物理工学」ほか(朝倉書店)

その他の電子リソース

■明治・大正・昭和の読売新聞

読売新聞の明治7年(1874)11月2日創刊号～昭和20年(1945)12月31日を収録した記事索引とマイクロフィルムからデジタル化した紙面イメージを一体化させたCD-ROMデータベース。記事を検索して、紙面を読むことができます。中央図書館、医学部分館、医学部保健学図書室の特定のPCで利用できます。カウンターでお尋ねください。

■医中誌WEB

東山キャンパスでは利用できなかった医中誌WEBが、鶴舞キャンパスや大幸キャンパスと同じように利用できるようになりました。ご活用ください。

附属図書館WEBページ
<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/>

(参考調査掛)

した。さらに、4月19日(土)午後には関連講演会が開催され、酒井シヅ先生の「濃尾の名医たち」と題する講演と附属図書館研究開発室員

による展示資料解説、資料整理経過報告などがあり多数の参加者がありました。詳細については次号で関連の報告を掲載する予定です。



特別展



講演会

➤➤➤➤➤➤➤➤➤ お知らせ ➤➤➤➤➤➤➤➤➤

☆ 中央図書館の書架整理日の廃止(試行)に伴う開館予定について

ー中央図書館の開館日が増えてご利用しやすくなりますー

中央図書館ではサービス向上のため、毎月の書架整理のための休館日を廃止し、開館する試行を昨年12月から行ってきましたが、この試行を平成20年度も引き続き一年間試行します。東山キャンパスの停電日の11月16日(日)と年末年始を除き、特別な事情(台風、大規模工事等)がない限り継続して開館しますので、今年度も休館日をあまり意識することなく、中央図書館をご利用いただけます。

☆ 中央図書館4階サテライトラボ(情報メディア教育センター)の再開について

中央図書館の4階のサテライトラボが4月から再開いたしました。PC台数も20台から30台に増え、また第二サテライトラボとして同じPC10台が2階のPCコーナー東北角に設置されました。なお、今回からプリンタ利用がプリペイドカード利用方式になりましたのでご注意ください。

☆ 理学部物理、生命理学、地球惑星科学図書室の移転について

理学部E館耐震改修工事に伴い、物理学、生命理学、地球惑星科学図書室は、理学部A館228室に移転しますので一時閉室いたします。閉室期間は平成20年5月19日～6月上旬の予定です。

☆ 「七夕の宵コンサート(仮称)」の開催予定について

中央図書館では、7月5日(土)の閉館後、17時すぎから館内でヴァイオリンコンサートを開催する予定です。奏者は、塩見裕子さんで、京都市交響楽団や京都チェンバーオーケストラなどで活動し、最近各地のオーケストラとの共演やテレビの音楽番組にも出演し活躍されている音楽家です。コンサートでは、主にヴァイオリンの独奏による曲目を予定しています。入場無料でどなたでも入場していただけますのでぜひご来場ください。詳細は後日広報をいたします。

【行事等】 < 20. 1. 6 ~ 20. 4. 5 >

- ・名古屋大学豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイ・貴重書の展示「学報の表紙を飾った貴重図書」(豊田講堂) <2/2>
- ・東海地区大学図書館協議会平成19年度第2回研究会(中部大学) <3/5>
- ・東海地区デジタルレファレンスフォーラム(野依記念学術交流館) <3/7>

- ・図書修復実務講習会(中央図書館) <2/26, 3/10>

編集委員会

- 増田晃一(委員長) 福岡千絵(中) 長野祐子(中)
- 立花千津子(中) 早川沙耶華(文学) 山口典子(法学)
- 金田志保(保健学) 端場純子(工学)